

海老神社の祭神さま

まえがき

現在の海老神社の場所（海老字向田二十八番地）に諏訪神社が鎮座していた。明治四十二年に近辺の六神社を合祀し、諏訪神社は海老神社と名称を改めた。もともと奥宮として白山社、本殿の左側に摂社として三社（金比羅社、稻荷社、八幡社）があったところに六社が加わった。さらに日露戦争から大東亜戦争の間に戦死された英霊を祀る礎霊社（護国神社）が明治三十九年に勧請され、令和元年に八幡山から遷座された秋葉社も含めるとそれこそ数えきれないほどの神社が鎮座しており、そこで祀られている数多くの祭神さまたちに海老の氏子を見守っていただいている。令和二年の海老神社大祭に合わせてそれぞれの社の祭神について、説明したものが本冊子である。読み方はカタカナにしてあるが命（ミコト）や神（カミ）の読み方は省略してある。なお、記事の内容は「古事記」「日本書紀」を始め、戸部民夫著「日本の神様がよくわかる本」、武光誠著「知っておきたい日本の神様」などの著作本や種々の神社のホームページなどをも参考にさせていただいた。また、御神徳については主なもののみを掲載させていただいていることをご承知おきいただきたい。

目次

	*旧所在地	
1 諏訪神社	向田	頁
	建御名方命(タケミナカタ)	2
	菅原神(スガワラ)	3
	市杵島比売命(イチキシマヒメ)	3
2 若松神社	*須山	
	阿遲耜高日子根命(アヂスキタカヒコネ)	3
3 熊野神社	*方瀬	
	伊弉册命(イザナミ)	4
4 白山神社	*身平橋	
	菊理姫命(ククリヒメ)	4
5 津島神社	*大林	
	素戔嗚命(スサノオ)	4
6 金峰神社	*境場	
	押武金日命(オシタケカナヒ)	5
7 赤松神社	*大代・大林・古宿	
	建御名方命(タケミナカタ)	5
8 白山社(奥宮)	*入洞	
	菊理姫命(ククリヒメ)	6
	伊弉諾命(イザナギ)	6
	伊弉册命(イザナミ)	6

9 金比羅社(撰社)	*八幡山	
	大物主大神(オオモノヌシ)	6
10 稻荷社(撰社)	*八幡山	
	宇迦之御魂命(ウカノミタマ)	6
11 八幡社(撰社)	*八幡山	
	誉田別命(ホンダワケ)	7
12 礎霊社(境内社)向田		
	戦没者英霊	7
13 秋葉社(拜殿内)	*八幡山	
	迦具土命(カグツチ)	7
	猿田彦命(サルタヒコ)	7

諏訪神社

○建御名方命(タケミナカタ)

神徳 五穀豊穰・国土安隠・商売繁盛・開運長寿
由来

古事記によれば、大國主命(オオクニヌシ)の次男で、剛力の持ち主だった。天照大神が大國主命に国を譲るよう要求したが、次男の建御名方命は納得せず抵抗した。天照大神が送った武甕槌命(タケミカヅチ)と力比べをしたが建御名方命は完敗、諏訪まで逃げ

た。敗者にも関わらず武芸神として鎌倉時代の武士たちの守護神となった。戦国時代の武田信玄しかりである。それは強い神に戦いを臨んだ建御名方命を勇者として崇めたのである。また、風神としても崇められている。鎌倉時代の二度の元寇の際に日本を救った風神とされている。そのため九州地方にも諏訪神社が航海の守り神として数多く祀られている。長野県の諏訪大社から分祀されたが勧請の年代などの詳細は不明である。

○菅原神（スガワラ）

神徳 受験合格・詩歌・文筆・芸能・学問上達
由来

「天神さま」とか「天神さん」と呼ばれている。菅原道真を祀っている。菅原道真は右大臣であったが左大臣の藤原時平の陰謀により九州の太宰府に左遷され、亡くなった。以後、京都では天災が次々に起こり時平も若くして死んでしまった。これは道真の祟りと恐れられた。そこで道真の怒りを鎮めるため北野天満宮が建立された。「行きはよいよい、帰りは怖い」と「とおりゃんせ」で歌われる。天神さまは正直な神さまなので、両親と一緒に天神さまの前で子供は「いい子にします」と言わせられた。親は「嘘を

つくると天神さまに怒られるからね」というわけで、行きは良くても帰りは怖かったのである。

○市杵島比売命（イチキシマヒメ）

神徳 子孫繁栄・財福・音楽・技芸・芸能・水の安全
由来

素戔嗚命の剣から産まれた美人三姉妹で、宗方三女神と呼ばれるうちの一人。三女神は天照大神から玄界灘に降って海の守護神になるよう命じられた。福岡県の宗像神社がそうである。神仏習合により仏教の弁財天と同じと考えられたので「弁天様」として祀られた。七福神の一神であったが、日本に入ってから水の子、農業神として崇められるようになった。明治になって神仏分離により、弁天様は祭神として認められなくなり、市杵島比売が祭神となった。

若松神社

○阿遅耜高日子根命（アヂスキタカヒコネ）

神徳 農事守護・不動産業守護・家内安全・商売繁盛
由来

耜（すき）は農具の鋤と書かれることもあり、元々は鋤から連想される農耕神であったと考えられてきた。古事記によれば、天若日子（アメノワカヒコ）の

葬式に天から降ってきた阿遲稻高日子根命。ところが天若日子にそっくりだと家族から言われた阿遲稻高日子根命は「死んだ者と同じにするな」と大變怒って葬式の会場を蹴飛ばして天空に帰ってしまった。それほどの激しさと空と地上を行き来する姿を見て人々は雷神と恐れた。鉄でできた鋤には雷が落ちるので、これも雷神だと考えられるようになった理由の一つである。昔の人は稲の霊こそは雷神の妻だと信じていた。稲妻と呼ぶのはそのためである。こうして恐ろしい雷神は稲の豊作をもたらすと考えたのである。

熊野神社

○伊弉冊命（イザナミ）

神徳 国土安穩・延命長命・無病息災・漁業神
由来

熊野三山は熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社である。そこには山、海、滝という自然が背景にある。熊野神社の祭神は多いが熊野牟須美神（クマノムスビ）を主祭神としている。別名は伊弉冊命（イザナミ）である。伊弉冊と伊弉諾（イザナギ）は神々で初めての男女神であり、日本国をお造りになった神

様である。この二神から数多くの神様が生まれた。最後に火の神（秋葉社を参照）を産んだ伊弉冊は命を落としてしまい黄泉の国に行ってしまう。それを追った伊弉諾は穢（けが）れた伊弉冊から逃れ帰ったという神話は有名である。戻ってきて身体を清めたとき、伊弉諾の左目から天照大神が右目から月読神（ツクヨミ）、鼻から産まれたのが素戔嗚神（スサノオ）である。

白山神社

○菊理姫命（ククリヒメ）

神徳 五穀豊穰・縁結び・安産・育児・家内安全
由来

元々は石川県の霊峰白山を御神体とする白山比咩（シラヤマヒメ）であった。菊理は「括（くく）り」の意味と捉えられて、人と人を括る縁結びの神と考えられている。ここから分霊された白山神社・白山社は石川県、岐阜県、新潟県、愛知県を中心に全国二百七社以上ある。また、「山の神（磐長姫）」と言う説も奥三河には残っている。磐長姫は醜く嫉妬深い女性であったので男性しか山の神のお祭りに参加してはいけなかった。お供物も決して美しいとは言えな

い「おこぜ」にしたと言う話はよく聞く。

津島神社

○素戔嗚命（スサノオ）

神徳 疫病・災難・厄除・健康・無病息災・開運招来
由来

愛知県津島市の津島神社が総本社であり明治以前は「天王さま」と呼ばれていたところが多い。日本書紀では「素戔嗚命」、古事記では「建速須佐之男命（タケハヤスサノオ）」と記載されている。天照大神の弟である。高天原（たかまがはら）で大暴れをして追放され、出雲に住むことになった。八岐大蛇（やまたのおろち）を退治する神話は有名である。このとき助けた櫛名田比売（クシナダヒメ）（日本書紀では奇稲田姫）と結婚して子孫を残した。その子孫が大国主命で、日本の国作りを行った神様である。

金峰神社

○押武金日命（オシタケカナヒ）

神徳 金運・商売繁盛・勝負・出世・開運招福
由来

古事記によれば広国押武金日命とある。吉野山の

金峯山（きんぷせん）寺の蔵王権現と吉野山の金峯（きんぷ）神社とよく混同される。金峯山寺は修験道のメッカのような存在で蔵王権現を祀る金峯山修験本宗大本山である。金峯神社は奈良県吉野の「地の神様」である。海老神社に保管されている棟札には峯ではなく峰の漢字を使用しているがその理由はわからない。金峰山と書いて「きんぷうざん」と呼ぶ山は日本各地にある。愛媛県の金峰神社は「かねみね」と読む。江戸時代「和漢三才図会」で人皇二七代安閑天皇が亡くなって、金峯山に座王大権現が現れ「我こそは安閑天皇なり」と言ったと記載されている。現在でも日本全国に安閑天皇を祭神とする神社が百社ほどあるが、なぜこの地に祀られたかは不明である。

赤松神社

○建御名方命（タケミナカタ）

神徳 諏訪神社の建御名方命を参照。
由来

海老神社に保管されている棟札に創建は承暦三年（一〇七九）とあり、大代・大林・古宿と記載されている。日本でもっとも古い棟札であるが、実証できる史料は見つかっていない。明治時代の村誌には明治

五年に村社となったとある。明治四十二年に海老神社に合祀された。長い歴史のあった神社であったが詳細は謎に満ちた神社である。設楽町清崎の赤松神社は四谷の赤松神社から分霊されたと伝えられているが、祭神は武甕槌命（タケミカヅチ）という。諏訪神社の建御名方との力比べの勝者である。ちなみに武甕槌命は鹿島神社や春日大社などの祭神である。

白山社

○菊理姫命（ククリヒメ）

○伊弉諾命（イザナギ）

○伊弉冊命（イザナミ）

神徳 菊理姫命・伊弉諾命は白山神社・熊野神社の項を参照。伊弉諾命の神徳は心願成就・厄除開運由来

菊理姫命と伊弉冊命については前項の白山神社、熊野神社を参照のこと。伊弉諾命は伊弉冊命の夫神である。神事の初めは修祓（しゅばつ）を行う。これは伊弉諾命（伊弉諾は日本書紀、伊邪那岐は古事記の記述）が黄泉の国から戻ったとき、祓戸（ハラエド）大神によって罪と穢れを払ってもらったことに由来する。また、伊弉諾は天照大神の父神でもある。

金比羅社

○大物主大神（オオモノヌシ）昔は金比羅大権現

神徳 漁業・航海守護・諸願成就・雨乞・商売繁盛由来

「金比羅船々、追手（おいて）に帆かけてシユラシユシユシユ」という歌が流行ったのは明治大正時代である。本拠地は四国の琴平である。元々は瀬戸内海を航行する船の安全を守る目印だった。朝廷は宗方三女神を海神としたが、琴平の人々は大神（おおみわ）神社の祭神である大物主大神を信じていたので現在も祭神として崇めている。インドのクンピール神から金比羅（コンピラ）と名付けられた。インドを流れるガンジス川は一年中水量が多いことから雨乞の神様としても信仰されてきた。五穀豊穡を雨がもたらすので農業を営む人々の信仰も厚かった。

稻荷社

○宇迦之御魂命（ウカノミタマ）

神徳 五穀豊穡・商売繁盛・芸能上達・産業興隆由来

「うかのみたま」は、稲に宿る精霊のこと。稲は人々

が生きるための食物を与えてくれるので食物神と考えられた。古事記では素戔鳴命の子ども、日本書紀では伊弉諾と伊弉冊が産んだ子とある。奈良時代、渡来系の秦氏が氏神とした。和銅四年(七一一)に秦氏の移り住んだ伏見の稲荷山に神が現れたと伏見稲荷大社の伝記にあり、秦氏の勢力拡大とともに広まっていった。仏教思想とも習合し、中世以降は全国に広まった。庶民の間では「お稲荷さん」として親しまれるほどにもなった。豊川稲荷はその一例である。海老の東泉寺の脇にも稲荷社が祀られている。

八幡社

○誉田別命(ホンダワケ)

神徳 国家鎮護・殖産興業・家運隆昌・悪病災難除
由来

大分の宇佐八幡宮が総本宮である。祭神である誉田別命は日本の歴史時代の始まりと言われている。応神天皇のことである。応神と言う呼び方は諡(おくりな)で生前は誉田別命と呼ばれていた。全国に三万社ほどあり、全国津々浦々で祀られている。これは平安時代後期に武家の棟梁である清和源氏が八幡信仰を盛んにしたからと言われている。源義家は石清水八

幡宮で元服し「八幡太郎」と名乗った。源氏の鎌倉幕府の世となり、武士の間に広まった。徳川家康も清和源氏の子孫であると銘打ったのでさらに全国に広まった。

礎霊社

○戦没者の御霊

神徳 海老の地域に住む人々の守り神
由来

日本人は家庭という共同体に限らず、地域社会にとって大切な働きをした死者の御霊が地域社会の守り神と考えてきた。そのような考え方によって明治三十九年に「護国神社」として創建された。しかし、戦後になって護国神社という名称は一県に一社しか認められなかったため、各地域では名称を変えて御霊を祀っている。海老においては「祖霊社」として神社庁には登録されている。大切なのは名称ではなく、家族のため、国を守るために戦場で命を落とした御霊を忘れてはならないことである。

秋葉社

○迦具土命(カグツチ)

○猿田彦命（サルタヒコ）

神徳 迦具土神は鎮火・火難除、猿田彦命は延命長
寿・交通安全・縁結び・災難・方位除
由来

迦具土神は火産霊神（ホムスビ）とも言われ、「秋葉（あきは）さま」として知られている。愛宕（あたご）社と呼ばれている地域もあるが祭神は同じである。火は人間にとって「脅威と恩恵」という二面性を備えている。自然神の多くはこの二面性を備えている。秋葉社の総本社は静岡県浜松の秋葉神社である。火事の多かった江戸に秋葉社を勧請した場所が現在の秋葉原である。また、猿田彦命は高天原から天孫降臨した瓊瓊岐命（ニニギ）を、日向の高千穂まで道案内をした。鼻が長い風貌は猿とも天狗とも言われた。道案内をしたことから道祖神信仰と結びつき、通行人の安全を守る神となった。さらに江戸時代になって猿田彦命と庚申様の申（さる）との共通点から神仏が習合した。海老神社に遷座された秋葉社は中町と丁塚の秋葉講と庚申講を信仰した人たちが勧請したと考えられる。

あとがき

海老神社に参拝すれば日本の神様の多くの神徳を授かるのではないか、と思うほど多くの神様たちに守られている海老神社の氏子である。もちろんどれだけでも多くの神様が鎮座しているかが重要ではなく、どれだけの信心と感謝をもって参拝するかである。感謝とは心がありがたく感じることに。感謝の反対語は怨嗟（えんさ）といい、意味はうらみ嘆くこと。自然現象に「脅威と恩恵」があるように、人の心にも「感謝と怨嗟」の心がある。人も自然界の一部であると考えれば至極当然のことであろう。悲しいとき、つらいときには人をうらんだり、自分自身に嘆いたりせず、海老神社の神前で「ありがとうございます」と感謝の気持ちをお伝えすることで心が晴れることもあるのではないだろうか。

* 「海老神社誌第六号」で記載した諏訪神社と赤松神社の祭神が本冊子と異なっておりますが、明治初期に調査された「村誌」の内容が妥当と考えて変更いたしました。

海老神社

宮司 松下恒雄

令和二年 十月十一日

海老神社大祭にて